



TITLE:

# モンゴル時代のチベットにおける 都元帥

AUTHOR(S):

山本, 明志

---

CITATION:

山本, 明志. モンゴル時代のチベットにおける都元帥. チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開 2018: 25-38

ISSUE DATE:

2018-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/235449>

RIGHT:

# モンゴル時代のチベットにおける都元帥

山本 明志

## *Du dben shwa (Dou yuan shuai) in Tibet during the Mongol era*

YAMAMOTO Meishi

**Abstract :** In the 13<sup>th</sup> and 14<sup>th</sup> centuries, the Mongol Empire introduced administrative organisations and government posts into Tibet. The official titles in Tibet in this age were well researched, however, researchers paid attention mainly to the title of “*dpon chen*,” which was held by secular chiefs of the Sa skya pa sect. On the other hand, Chinese historical record *Yuan shi* (『元史』) shows that the administrative office of the Central Tibet was called *Xuan wei shi si dou yuan shuai fu* (宣慰使司都元帥府), whereas the chief of this office was *Xuan wei shi* (宣慰使). The question is whether or not *dpon chen* and *Xuan wei shi* referred to the same position.

This article examines another official title *du dben shwa*, which is derived from Chinese 都元帥 and frequently appears in *rlang kyi po ti bse ru* (RP) written in the mid-14<sup>th</sup> century. Firstly, the expression “*du dben shwa* belongs to the *swon wi si*” can be found in RP; this indicates that the *swon wi si*, also derived from Chinese is the name of the administrative organization 宣慰司, and not the name of the post 宣慰使. Secondly, examination of the RP revealed that there were at most four *du dben shwa* at the same time, and the position of *du dben shwa* was lower than *dpon chen*. The *Yuan shi* records the quota of *Xuan wei shi* as five. This article concludes that the chief of the *Xuan wei si* was *dpon chen*, however, *dpon chen* and four *du dben shwa* were all called *Xuan wei shi* in the Chinese sources. Some instances prove that one family produced some *dpon chen* and some *du dben shwa*, and such families kept large estates. Hence, such families can be considered as ruling families of the Central Tibet in that period.

关键词：十四世纪，都元帅，宣慰司，本钦，绛求坚赞

**Keywords :** 14<sup>th</sup> century, Commander-in-chief (*dou yuan shuai*), Pacification commission (*xuan wei si*), *dpon chen*, *byang chub rgyal mtshan*

# 1 研究史と問題点

13～14世紀のモンゴル時代、チベット関連官衙として中央政府には総制院（至元25年〔1288〕に宣政院と改称）が、チベット在地には最終的に三つの宣慰使司都元帥府がモンゴル政権（元朝）によって置かれる。これまで、漢籍史料とチベット語史料を対照しつつ、これらの行政機関についての研究が蓄積されてきた。先行研究で特に注目されたのは、チベット語典籍史料に頻繁に出現する「プンチェン（dpon chen）」<sup>1</sup>職が、モンゴル政権の行政機構の中で、どのように位置づけられるかという問題であった。

モンゴル時代、特にクビライ＝カアン（在位：1260-1294）の時代以降、中央チベット西部のサキヤ（sa skya）寺の僧が、モンゴル皇帝の宗教上の師たる「帝師」として中央政府に迎えられた。それゆえ、政権と密接な関係を持ったサキヤ寺を中心とするサキヤ派が、チベット在地で優位な立場にあった。そして、このサキヤの行政長官がプンチェンと呼ばれたのである。1346-1363年に成立した『紅史』（以下DMと略記）では、5人目のプンチェンとして名が挙がるチャンリン（byang rin）が、「セチェン（＝クビライ＝カアン）の御心になつて、swon wi siの印と水晶の印を賜った」（DM：53）と記されている。これを根拠に陳得芝は、チャンリン以降の歴代プンチェンは、正式には「烏思蔵（ウ・ツァン：dbus gthang＝中央チベット）宣慰使」であったと考えた（陳得芝 1984：111）<sup>2</sup>。このプンチェン＝宣慰使説を支持する研究者も多くいたが（沈 1988；張 1994；張 1997；張 1998；張 2003；沈 2003）、Petechはプンチェンが宣慰使に任命されるのは例外処置のように思われるとして、プンチェン＝宣慰使説の正否については判断できないとした（Petech 1990: 44-45）<sup>3</sup>。その後、この問題について新たな展開は見られない。

<sup>1</sup> dpon は「官員」、chen は「大きい」。文字通り「大官」、つまり権限の最も大きい俗人官員と理解されてきた（陳得芝 1984: 103；陳得芝 2001: 281-286など）。

<sup>2</sup> DM などによれば、最初のプンチェンに任命されたシャキヤ＝サンボは、ウ・ツァンの zam klu gun min dbang hu の印を賜ったとされる。DM 和訳：125-126は「三路軍民王府」、DM 中訳：48は「三路管民万戸」と訳す。陳得芝はこれを「烏思・蔵三路軍民万戸」と考え、プンチェンの最初の正式な官職名はこれであるとした（陳得芝 1984：103）。

<sup>3</sup> これに先立ち乙坂1989も Petech と同様、プンチェンが宣慰使ならば、ことさら史料で特記される必要はないとし、プンチェン＝宣慰使説に疑問を呈している（乙坂 1989：24）。また王 1996；王 1998もプンチェンが宣慰使であるのは通例ではないという立場をとる。

ところで上で引用した DM に見える swon wi si を、DM 和訳は「宣慰司」、DM 中訳は「宣慰使」と訳す (DM 和訳：126；DM 中訳：48)。宣慰司は宣慰使司の略称で、行政機関の名称であるが、宣慰使は宣慰使司の長官を指す語であり、官職名である。先の例のように、「swon wi si の印」と言ったときは、それが機関の印なのか機関の長官の印なのかは、即断しがたい<sup>4</sup>。さて、swon wi si とチベット文字で綴られた漢語由来のこの言葉は、当該時期に関するチベット語典籍史料に頻出する。しかし当時のチベット人にとってこの言葉は、「機関」を意味したのか「地位」を意味したのか、あるいは区別するところはなかったのか、これまで厳密に検討されてはこなかった。

また中央チベットに設置された宣慰使司については、『元史』巻87、百官志3、宣政院の条には次のようにある。

#### 【史料1】

烏思蔵納里速古魯孫等三路宣慰使司都元帥府、宣慰使五員、同知二員、副使一員、經歷一員、鎮撫一員、捕盜司官一員。其属附見、

納里速古児孫元帥二員。

烏思蔵管蒙古軍都元帥二員。

担裏管軍招討使一員。

烏思蔵等処転運一員。

沙魯田地裏管民万户一員。(以下略) (中華書局点校本：2198-2200)

この「烏思蔵納里速古魯孫等三路宣慰使司都元帥府」が、問題の中央チベットに設置された宣慰使司である。『元史』巻17、世祖本紀14、至元29年(1292)9月甲申の条には「烏思蔵宣慰司」の中央政府への上申記事があり、その三日後の丁亥の日の条を見ると「宣政院の言に従い、烏思蔵納里速古児孫等三路宣慰使司都元帥を置く」とある(中華書局点校本：366-367)。これは、烏思蔵＝ウ・ツァンのみを管轄していた宣慰司が、納里速古児孫＝ガリコルスム(mnggaris skor gsum：チベット西部のガリ三部)も管轄範囲に加え、「宣慰使司都元帥」を設置することになった、ということの意味する(山本 2009：9-10)。百官志にいう「ウ・ツァン・ガリコルスム宣慰使司都元帥府」が成立したのは、この時点であると考えてよいだろう。

<sup>4</sup> バクパ文字の「烏思蔵納里速古魯孫等三路宣慰使司都元帥府之印」が捺された文書が存在することについては、中村 2005：49-50参照。

ところでこの宣慰使司都元帥府の長は、百官志では「宣慰使」であるという。一方、延祐七年（1320）までの法令文書を収録する、元刊本の『大元聖政国朝典章』典章7、吏部1、官制1、職品、内外文武職品、従二品、外任、軍民職をみると、「各処宣（尉）〔慰〕使司〔都〕元帥」の職名が挙がり、それが設置される地域の一つに「烏思蔵納憐棟古里孫等処路」の名が見える。また同正四品、外任、軍民職には「烏思蔵納〔里〕速古魯孫等三路宣慰副使副都元帥」の職名が挙がる。「烏思蔵納憐棟古里孫」と「烏思蔵納〔里〕速古魯孫」は、わずかな音写の違いがあるものの、「ウ・ツァン・ガリコルスム」を示している。また前者の「等処路」は後者の「等三路」と同じ意味だろう。さて、ここにみえる官職名は、「宣慰使」ではなく「都元帥」である。後者からは、「宣慰副使」「副都元帥」の両方が存在していたとも考えられる<sup>5</sup>。さらに、先に挙げた『元史』世祖本紀、至元29年9月丁亥の条が「宣慰使司都元帥を置く」と言う点も見逃せない<sup>6</sup>。

『元史』の百官志では「宣慰使」、『大元聖政国朝典章』では「都元帥」が宣慰使司都元帥府の長であるとされている。この点は、どのように理解すれば良いのであろうか。そして同時代のチベット人達は、このようなモンゴル政権が持ち込んだ行政機関や官職をどのように認識していたのであろうか。

これらの問題に直接答える史料は無いが、本稿が注目したいのは、当該時代に関わるチベット語典籍史料に頻出する *du dben shwa* という官職名である。これが漢語の「都元帥」をチベット文字で写したと考える点に、異論は出されていない。一方、チベットにおける都元帥については、これまでほとんど何も言及されてこなかった。本稿はまずこの都元帥を中心に、都元帥と宣慰使・プンチェンの関係を取り上げる。そして都元帥に就任した人物の背景を検討し、当時のチベットにおける都元帥の社会的地位について考えてみたい。

## 2 都元帥（*du dben shwa*）と *swon wi si*

モンゴル時代におけるチベットの状況を記すチベット語典籍史料は多くあるが、本稿では、特に14世紀半ばの中央チベット情勢について、「自伝」の形式で記されたユニークな史料である『ラン＝ポティセル』（以下 RP と略記）を中

<sup>5</sup> 「副使都元帥」にあたるチベット語在証例は、RP: 231に *hu shri du dben shwa* がある。

<sup>6</sup> 『元史』中華書局点校本は、「都元帥」の後ろに「府」の字、あるいは員数が脱落しているのではないかと注記するが、校訂までは行なっていない（中華書局点校本：378, n. 10）。

心に検討を進めたい。これは、中央チベット東部のウ (dbus) 地方のパクモドゥ万户長であった、チャンチュプ=ギェルツェン (byang chub rgyal mtshan) が著したものである<sup>7</sup>。成立は14世紀末頃と見られており、ほぼ同時代史料と言える。この史料には、チャンチュプが関係を持った都元帥 (du dben shwa) についての記述が豊富に残されている。

まず、1354年、サキヤのブンチェン職にあるギェルワ=サンポが、サキヤ派の帝師の二人の息子によって監禁された時の記事を見てみよう<sup>8</sup>。以下、チベット語和訳の括弧内は筆者による補足・注記である。

### 【史料2】

柱の右手前を私 (チャンチュプ=ギェルツェン) の座とした。左手をシュンギェル (gzhon rgyal) 都元帥と swon wi si の者たち (swon wi si pa rnams) の座とした。右側の壁近くを阿闍梨タルリンと、その場にいるサキヤの弟子や長老たちの座として、食事をたてまつった。私 (チャンチュプ) は次のように言った。「ブンチェン=ギェルワ=サンポは一品 (phing gcig) の大臣<sup>9</sup>で、ブンチェン=シャキヤ=サンポの地位を有する者であるが<sup>10</sup>、ラマ帝師 (ti shri) の二人の息子が、監獄に捕えたのである。そこで、すべての者たちが、私に『助けに来てほしい』と言うので、来たのである。今、モンゴルの都元帥 (hor gyi du dben shwa) はいない。貴君、シュンギェル都元帥は、第三の宝の虎の頭 (虎頭牌か)、ブンチェンの印と同じ、六つの部分からなる印 (中訳は「六棱宝印」) を有しているのだから、貴君の下、swon wi si の者 (swon wi si pa) と軍站 (dmag -jams)<sup>11</sup>、ウ (dbus) の者すべてで、中軍を形成せよ。(後略)」。[中略：シュンギェルたちは、チャンチュプが先行しなければ行かないと主張する]。私とウの人たちで中軍を形成した。シャンパが私の後に従い、シュンギェル都元帥が長となって、モンゴル軍で右軍を形成した (RP: 250-251; cf. 陳慶英 1992a: 263; Olaf2013: 149-151)。

<sup>7</sup> これを用いた研究として、チャンチュプ=ギェルツェンの活動について検討を加えた Kuijp1991、パクモドゥ派の歴史について詳細に扱った Olaf2013が重要である。

<sup>8</sup> 監禁した人物については、佐藤1963, pp. 161-162, n. 31に考証がある。

<sup>9</sup> 彼がモンゴル朝廷に赴き、宣政院の院使 (従一品) となったことを言うのだろう (山本 2011: 34)。

<sup>10</sup> ブンチェン=シャキヤ=サンポは、最初のブンチェンである (前掲注2)。ギェルワ=サンポが、正統なブンチェンの職の継承者であることを強調する表現だろう。

<sup>11</sup> この語についてはさらに考察を進める必要があるが、ひとまず山本 2009: 8-9参照。

まず、1354年の時点でモンゴル人の都元帥が中央チベットにはいないとされている点が注目される。つまり、都元帥はチベットの外から赴任してくるモンゴル人である場合もあったのだ<sup>12</sup>。しかし、今はモンゴル人の都元帥はいないというのだから、ここに見えるシュンギェル都元帥はチベット人であると判断できる。

【史料2】には swon wi si の語も見える。swon wi si は漢語のチベット文字音写であるが、後続する「-pa」はチベット語の接尾辞であり、swon wi si pa は全体で「swon wi si に所属する人」を意味する。もしこの解釈が正しければ、swon wi si は官職名ではなく機関の名である。ところで藤堂1978で示される、当該時期の漢字の発音を示す中原音韻のローマ字転写では、司は「sī」、使は「ši」である。また RP: 231には hu shri du dben shwa という官職名が見え、RP 中訳: 148はこれを「副使都元帥」と訳す。これが正しければ、この時期、漢語の「使」はチベット文字で shri と写されていたといえる。さらに「使」と同じく藤堂1978で「ši」の音を持つとされる「師」は、「帝師」の音写において、ti shri と綴られる。この点からも、「使」の音写としては shri が期待されるのである。以上から swon wi si は、官職名の「宣慰使」ではなく、機関名の「宣慰司」を指す語として、当時のチベット人に認識されていたと結論づけられる。

さて、ここでは都元帥としてシュンギェルの名のみが挙がるが、同時に複数の都元帥が登場する記事もある。次に引用するのは【史料2】に先行する部分で、ギェルワ＝サンボが捕縛され、チャンチュプが対応を模索している場面である。

---

<sup>12</sup> RP には、非チベット語の名を有する都元帥の例が見いだせる。まず、「アセンカヤ (a swan ga ya) 都元帥」である (RP: 173)。Petech: 104 も言うように、āsān qay-a 「エセン＝カヤ」であろう。もう一例は、モンゴル都元帥自身について言及される箇所である。「(鎮西武靖王) 王子兄弟、ディンジュ (ding ju)、(ディクン派の) ゴムバが相談した。宣政院の長老 (dben rgan) の手から院の印と大ジャサ (-ja- sa chen mo = カアンの聖旨) を奪い、スンペル＝ワンフブン (gzung dpal dbang hu sbun) を殺し、モンゴル都元帥の印章をディンジュに与えて、モンゴル都元帥に任じる。ブンチェン＝ワンチュクペルを降ろして、ブンチェンの印章はブンのギェルサンに与えよう」(RP: 217-218)。おそらくスンペル＝ワンフブンはモンゴル都元帥で、これをディンジュに交代させる計画が述べられる部分である。スンペル＝ワンフブンはよくわからないが、ディンジュは、順帝トゴン＝テムルの至正年間に平章政事などとして活躍した「定住」を想起させる名前である。なおこの人物は DM: 111 で、カルマ派四世ルルペー＝ドルジェを中央政府から招請に来た宣政院使としても現れる。



## 【史料3】

シュドクについた日、ナルタンの小近侍が茶を奉りに来た。阿闍梨タルリンとドゥンギェル (don rgyal) 都元帥もそこに到着した。チェンポ＝ゲロンの二人もやってきて、私 (チャンチュブ) に帽子をとって敬意を表した。クシャン (sku zhang) 都元帥<sup>13</sup>とシュンギェル都元帥など、宣慰司の官員 (swon wi si-i mi dpon) すべてがここに集まった。(中略) 誰もいない状態で、わたしたち師と弟子二人で細かい相談をすることを (ソロワは) 求められたが、ドキャブ (rdo skyabs) 都元帥がいらっしゃり、彼 (ソロワ) は都元帥も座を外されることを求められたが、話の証人が必要であると申し上げ、都元帥は座につかれた (RP: 246-247)。

ここには、ドゥンギェル都元帥、クシャン都元帥、シュンギェル都元帥という三名の都元帥が同時に登場し、直後にドキャブ都元帥も現れる。つまり、最大四人の都元帥が同時に存在し得たことが、ここからわかる。また、「クシャン都元帥とシュンギェル都元帥など宣慰司の官員すべて」という表現からは、都元帥は宣慰司に所属していたことも判明する<sup>14</sup>。

以上から、モンゴル時代におけるチベットの都元帥は、同時に最大四名存在する官職であり、そして宣慰司所属の官職であると結論づけられる。しかし改めて【史料1】を見てみると、「ウ・ツァン・ガリコルスム宣慰使司都元帥府」に所属する官員として、「四名の都元帥」の記載はない<sup>15</sup>。この機関の長は「宣慰使五員」であるとされているのみである。一方『大元聖政国朝典章』では、「宣慰使」ではなく「都元帥」が「ウ・ツァン・ガリコルスム等処路 (等三路)」に設置されていた。このような状況からすれば、チベット語典籍史料中に見える、同時に四人まで存在し得る「du dben shwa = 都元帥」とは、『元史』百官志に言う五名の宣慰使のうちの四名を指すものと考えるのが自然であろう<sup>16</sup>。

すでに陳得芝は、「ウ・ツァン・ガリコルスム宣慰使司都元帥府」の長である宣慰使が五名いることについて注目していた。陳は、「みたところ元朝政府はさらに同時に、別の地方貴族を宣慰使に任命することができたようだが、筆

<sup>13</sup> クシャン都元帥については、RP 中訳：223, n. 2に考証がある。

<sup>14</sup> RP：157には「宣慰司の官員デギェルウー都元帥 (swon wi si-i mi dpon bde rgyal -od du dben shwa)」という表現があり、ここからも都元帥は宣慰司に所属するものであったことがわかる。

<sup>15</sup> 都元帥は、【史料1】の「烏思藏管蒙古軍都元帥二員」の箇所に見えるが、これは先述の「モンゴル都元帥」に関わるように思われる。



頭となる官員（すなわち主席の宣慰使）はサキヤのブンチェンであつたに違いない」と述べる（陳 1984：111）。つまり、宣慰使の筆頭はブンチェンで、残りの四名は「地方貴族」としたが、その具体像は示さなかったのである。これを都元帥の官職名を持つものであるとするのが、本稿の考えである。ブンチェンが筆頭の宣慰使で、残りの四名が都元帥と呼ばれるのであれば、【史料1】の宣慰使五員の表現とも矛盾しない。では、ブンチェンと都元帥の関係についてもう少しみてみよう。

#### 【史料4】

それからちょうど食事を終えると、クンガー＝ドルジェ（kun dga- rdo rje）都元帥、比丘のチャンギェル、ナムカーペル＝ダルガチ（nam mkha- dpal da ra kha che）<sup>17</sup>、侍者のグンネ、ナンパ＝センゲペル、ペルブム招討（dpal-bum cha-o ta-o）<sup>18</sup>など、ブンチェン自身のベテランスタッフ（las tshan rgan pa）たちが、左右に立ち並んだ（RP: 177）。

las tshan rgan pa を RP 中訳：115は「老資格執事」と訳すが、つまりはベテランスタッフということであろう。つまりこの史料に見える都元帥以下の六名は、ブンチェンの配下として働いている者であり、都元帥はブンチェンの掣肘を受ける存在であつたと言える<sup>19</sup>。

<sup>16</sup> 張 1994：63；張 1998：122は、「都元帥は宣慰司の長官であつて、宣慰使なのである」と述べるが、根拠が示されておらず、説明としては不十分である。また、張雲のその後の著作や論文でも、都元帥の地位についての言及は無い。本稿は張のアイデアを、根拠を示して論じたものといえる。また直接の史料的根拠は不明であるが、周清澍執筆の『中国歴史大辞典：遼夏金元史』上海辞書出版社、1986年、pp. 398-399「都元帥」の項目が、「クビライ以降、宣慰使司は都元帥府を兼ね、宣慰使は都元帥を兼ねる」とするものも参考になる。

<sup>17</sup> da ru kha che~da ra kha che < Mon. daruyaci. RP：212にはグンボキャブ＝ダルガチ（mgon po skyabs da ru kha che）、RP：241にはペルブム＝ダルガチ（dpal-bum da ra kha che）が現れる。【史料4】のナムカーペルも、グンボキャブ、ペルブムもチベット語由来の人名なので、チベット人のダルガチと解釈することもできる。また都元帥の場合と同じく、「人名-官名」の語順で書かれる点は興味深い。

<sup>18</sup> cha-o ta-o は、「招討」の音写だろう。『元史』巻91、百官志7、宣慰司には、「其れ遠服に在れば、又た招討・安撫・宣撫等の使有りて、品秩員数は、各おの差等有り」（中華書局点校本：2308）と見えるので、宣慰司には招討使が置かれることがあつた。【史料1】では宣慰使司都元帥府所属の官員として「担裏管軍招討使一員」が見えるが、RPに見える「招討使」がこれに当たるかは断定できない。なお RP 中訳は、この語をすべて「喬道」と音写しており、これでは漢語の原語がわからないので不適當である。RP にはその他、RP: 135に招討タシテン（cha-o ta-o bkra shis gtan）が見える。

<sup>19</sup> 張 1998：121-122も、ブンチェンと都元帥の関係を論じ、ブンチェンが都元帥よりも上位にいることを、根拠を示して明らかにしている。

【史料1】で「宣慰使五員」と記録されていた、中央チベット在地の宣慰使司都元帥府のトップは、実際はサキヤのブンチェン職にある者と、都元帥の官職に就いていた人々から構成されていた。そして「宣慰使五員」全員が同等の立場にあるのではなく、ブンチェンが最上位にあり、その下に都元帥が従っている、という関係にあったものと考えられる<sup>20</sup>。そしてブンチェンはサキヤの俗人官僚であり、都元帥は「モンゴル都元帥」も存在し得たものの、多くはチベット語人名を持っていたことも重要であろう。つまり、モンゴル政権の出先機関である宣慰使司都元帥府の長のポストは、在地のチベット人たちが占めていたと考えられるのである。

### 3 都元帥 (du dben shwa) に就任した人々

では次に、一体どのような人物が都元帥になったのかについて考えてみよう。RP には、都元帥やブンチェンの出自がわかる記述がいくつかある。まず、ブンチェン＝ギエルワ＝サンポ拘束事件の最終段階において、サキヤのラマたちとチャンチュブがギエルワ＝サンポの解放を交渉している場面で、ドキャブ都元帥が次のようにサキヤのラマに対して述べている。

#### 【史料5】

「この人（チャンチュブ）は、財物・食料（といった賄賂）をとらない。彼を信じて、ためらうべきではない。私たちツェルパ (tshal pa) は、人質を送らないかわりに、賄賂として千サンの金と、そのほか望まれるであろう財物を捧げようとしたけれども、彼は許さず、一人の息子を人質に取ったのである」(RP: 262)。

このドキャブ都元帥の発言から、彼自身はツェルパ出身であることがわかる。ツェルは中央チベット東部ウ (dbus) の地名であり、ラサの東南にあたる。この時代にはツェルには万戸長 (khri dpon) が置かれており (沈 1993: 546-547)、ドキャブ都元帥はツェル万戸長の一族と考えるのが自然であろう。

<sup>20</sup> 宣慰使司都元帥府が設置される以前から、サキヤのブンチェンが中央チベット行政を取り仕切っていたと思われ、同機関が設置されるに及び、ブンチェンがその長に就いたのだろう。そしてチベット社会においては、「ブンチェン」の呼称が使い続けられた。また「宣慰使」は、機関名である「宣慰司」と音が近いので、「宣慰司」と明確に区別できる「都元帥」が、地位を表す官職名としてチベット人たちに選ばれたのではないだろうか。

また、RP の最後にはチャンチュプが関係を持った人物についてまとめている箇所があり、ここにも都元帥の出自を考える上で参考になる記述がある。

#### 【史料6】

ナカルツェ (sna dkar rtse) の人であるプンチェン＝アクレン、ドルジェ＝グンポ都元帥父子と私たちは、関係が深い (RP: 354; cf. Olaf2013: 115, n. 17)。

先のツェルと同じく、ナカルツェにも万戸長が置かれており、中央チベット東部と西部の中間に位置している。プンチェン＝アクレンは、DM 等のプンチェンリストでは、9 人目のプンチェンとして名が挙がる人物で、サキャとディクン (-bri gung) との戦争時に活躍した。また彼は仁宗アユルバルワダ (在位: 1311-1320) から、ナカルツェ万戸長の世襲を認められている (陳慶英 1992b: 301-303; 沈 1993: 550)。さて、【史料6】からは、アクレンの息子のドルジェ＝グンポが都元帥であることがわかる。つまりこの都元帥も、万戸長一族から出ていると言えるのである。

万戸長となった人物は、在地の有力者であったことは想像に難くないが、その具体像について語る史料は少ない。筆者は山本 2011 で、プンチェン＝ギェルワ＝サンポ一族の系図を復元し、一族の成員が有した官職名も提示した。それによれば、まずこの一族は、ギェルワ＝サンポの父ダルマ＝クンチョクを筆頭に、万戸長の職を継承している<sup>21</sup>。そしてギェルワ＝サンポのみならず、その息子のタクパ＝ギェルツェンもプンチェンとなっている。つまりプンチェン職も一族で世襲しているのである。さらに、ギェルワ＝サンポの叔父であるクンガー＝ドルジェ、ギェルワ＝サンポの孫であるチャンチュプ＝ギェルワ＝サンポとクンガー＝ギェルツェンの三名は都元帥であった (山本 2011: 31)。

以上の例から、都元帥に就任する人物は、当時の中央チベット社会において、万戸長やプンチェンなどの要職を占めた有力家系出身者であったことが考えられる。そしてそのような一族は、領主としての背景を持っていた。

#### 【史料7】

チュームンカルの民戸も、ギェルツェン＝キャプが権力をつかって手に入れた。ディツェポン、デーモなどは、ヤーサンバ<sup>22</sup>が取った。ジュタンはタンバ<sup>23</sup>が取った。ツェンタン＝ラプラン、タドゥク、サンモ、ラルーを

<sup>21</sup> この一族がどこの地域の万戸長職を継承していたかは、確定できていない (山本 2011: 46, n. 17)。

<sup>22</sup> ヤーサン (gya- bzang) 万戸を指す (cf. 沈 1993: 547)。

はじめとする所は、(サキヤの) シャルパが取った。ムンカル、チェマ＝ラカンをはじめとする所は、ゲシェー都元帥が取った。上下サラ、ルーシン、グンタン、クンガーラ、セセプ＝ラカンの周囲などは、(サキヤの) カンサルワとブンチェン＝ユンツンの一族が取った。ツァトムワクなど、ドルジェ＝グンポ都元帥が取った所は、ブンチェン＝ウーセルセンゲがいらっしゃった時、ダムの地において、ドルジェ＝グン(ポ)都元帥に願って取り戻した(RP: 138; cf. Olaf2013: 115, n. 17)。

これは、1322年にチャンチュブがパクモドゥ万戸長に就任した記事の、少し後の部分に記されるものである。パクモドゥ万戸がもともと所有していた土地が、サキヤのシャルパやカンサルワ、ヤーサン万戸長、ブンチェン、そして都元帥などによって奪われていたが、ブンチェン＝ウーセルセンゲの立会いの下、一部を【史料6】に登場したドルジェ＝グンポ都元帥から取り戻した、というものである。この史料からは、万戸長だけでなく、都元帥やブンチェンも領主としての背景を持っており、互いに領地の奪い合いを続けていたことがうかがえる。

RPの記事からは、14世紀の中央チベットで都元帥職に就いていたチベット人たちは、元来領主層としての立場にあったことが見いだせる。そしてこのような領主層は、都元帥だけでなく、サキヤのブンチェンや万戸長のポストに就く者も一族から輩出しており、さらにそれらの職は、世襲されることも多くあったのである。

## 4 おわりに

以上、本稿ではRPの記事を中心に、14世紀の中央チベットにおける都元帥について検討してきた。『元史』百官志に見える「ウ・ツァン・ガリコルスム宣慰使司都元帥府」の長官である「宣慰使五員」は、チベット語典籍史料においては、筆頭にサキヤのブンチェンがおり、残りの四名は都元帥の官職名で呼ばれていたとするのが、本稿の結論である。従来、チベットにおける都元帥自体が研究の俎上にほとんど上らなかったが、ブンチェンと同じくらい重要な地位であったのである。しかし紙幅の都合上、都元帥の果たした政治的役割につ

<sup>23</sup> タンパ(thang pa)は万戸の一つであるタンポチェ(thang po che)ではないだろうか(cf. 沈1990: 563)。

いてはほとんど言及できず、また、文書史料についても論じられなかった。これらの点は、今後の課題としたい。

#### 参考文献<sup>24</sup>

##### [藏文]

DM: *deb ther dmar po*. [蔡巴貢嘎多吉1981 (和訳：稲葉正就・佐藤長1964；中文訳：蔡巴貢嘎多吉1988)]

RP: *rlangs kyi po ti bse ru*. [大司徒絳曲堅贊1986 (中文訳：大司徒絳求堅贊1989)]

##### [中文]

蔡巴貢嘎多吉：著、東嘎洛桑赤列：校注（1981）。《紅史》民族出版社。

蔡巴貢嘎多吉：著、東嘎洛桑赤列：校注、陳慶英・周潤年：訳（1988）。《紅史》西藏人民出版社。

陳得芝（1984）。元代烏思藏宣慰司的設置年代《元史及北方民族史研究集刊》8。（再録：陳得芝（2005）：101-112頁）。

陳得芝（2001）。再論烏思藏“本欽”《蒙元的歷史与文化》台湾学生書局。（再録：陳得芝（2005）：281-306頁）。

陳得芝（2005）。《蒙元史研究叢稿》人民出版社。

陳慶英（1992a）。元朝在藏族地区設置的軍政機構——一簡析元代藏族地区的三個宣慰司《西藏研究》1992年第3期。（再録：陳慶英（2006）：258-278頁）。

陳慶英（1992b）。元代烏思藏本欽紀略《元史論叢》4。（再録：陳慶英（2006）：279-311頁）。

陳慶英（2006）。《陳慶英藏學論文集》中国藏学出版社。

大司徒絳曲堅贊：著、恰白次旦平措：主編（1986）。《朗氏家族》西藏人民出版社。

大司徒絳求堅贊：著、贊拉阿旺・余万治：訳、陳慶英：校（1989）。《朗氏家族史》西藏人民出版社。

沈衛榮（1988）。元朝中央政府对西藏的統治《歷史研究》1988年第3期。（再録：沈衛榮（2010）：572-585頁）。

---

<sup>24</sup> 本文での引用は再録ページ数による。

- 沈衛栄 (1990). 元代烏思藏十三万戸考《歴史地理》7。(再録：沈衛栄 (2010) : 552-571頁)。
- 沈衛栄 (1993). 論元代烏思藏十三万戸の建立《元史論叢》5。(再録：沈衛栄 (2010) : 529-551頁)。
- 沈衛栄 (2010). 《西藏歴史和仏教の語文学研究》上海古籍出版社。
- 王献軍 (1996). 薩迦本欽非烏思藏宣慰使考辨《中国边疆史地研究》1996年第3期：89-94頁。
- 王献軍 (1998). 再論元朝中央政府对西藏的統治《歴史研究》1998年第3期：173-184頁。
- 張雲 (1994). 有関元代烏思藏宣慰司的幾個問題《西北民族研究》1994年第2期：58-72頁。
- 張雲 (1997). 薩迦本欽与烏思藏宣慰使関係問題再探討《中国边疆史地研究》1997年第1期：35-45頁。
- 張雲 (1998). 《元代吐蕃地方行政体制研究》中国社会科学出版社。
- 張雲 (2003). 《元朝中央政治藏制度研究》黒龍江教育出版社。

[日文]

- 稲葉正就・佐藤長 (1964). 『フウラン・テプテル ―チベット年代記―』京都：法藏館。
- 中村淳 (2005). 元代チベット命令文の総合的研究にむけて、『駒澤大學文學部研究紀要』63：35-56頁。
- 乙坂智子 (1989). サキャパの権力構造、『史峯』3：21-46頁。
- 佐藤長 (1963). 元末明初のチベット状勢、佐藤長・田村実造：編『明代満蒙史研究』京都：京都大学文学部。(再録：佐藤長 (1986) : 89-171頁)。
- 佐藤長 (1986). 『中世チベット史研究』京都：同朋舎。
- 沈衛栄 (岩尾一史：訳) (2003). 元、明代ドカムのリンツァン王族史考証、『東洋史研究』61-4：76-114頁。
- 藤堂明保 (編) (1978). 『学研漢和大字典』東京：学習研究社。
- 山本明志 (2009). チベットにおけるジャムチの設置、『日本西藏学会会報』55：3-13頁。
- 山本明志 (2011). 13・14世紀モンゴル朝廷に赴いたチベット人をめぐって、『待兼山論叢』45 (史学篇)：27-52頁。

[欧文]

- Kuijp, L. W. J. van der 1991: “On the Life and Political Career of Ta’i-si tu Byang-chub rgyal-mtshan (1302–?1364).”, E. Steinkellner ed., *Tibetan History and Language. Studies Dedicated to Uray Géza on his Seventieth Birthday*, Wien, pp. 277–327.
- Olaf, C. 2013: *Medieval Rule in Tibet: The Rlangs Clan and the Political and Religious History of the Ruling House of Phag mo gru pa: With a Study of the Monastic Art of Gdan sa mthil*, Wien.
- Petech, L. 1990: *Central Tibet and the Mongols*. (Serie Orientale Roma LXV), Rome.

山本 明志 (やまもと めいし)  
大阪国際大学

---

岩尾一史・池田 巧 (編)  
『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』  
京都大学人文科学研究所 2018年3月刊

---